

「聞く」は命を守る

「それでは、園長先生のお話を聞きましょう。」担当の松永先生の声が響きました。

「いいかい、みんな。地震が起きたとき、幼稚園が火事になったとき、先生たちは一生懸命みんなを守るよ。地震で天井のかけらや蛍光灯が落ちてきたとき、先生たちはみんなの上にかうやって覆いかぶさってみんなを守るよ。先生たちは、自分の手が折れてしまっても、自分の足がつぶれてしまっても、みんなを包んでみんなの命を守るよ。幼稚園が火事で炎が迫ってきたとき、先生たちはみんなを連れて急いで外へ逃げ出すよ。だから、だからね。先生たちが真剣な顔でお話をし出したら、みんなはさっとお口を閉じるんだよ。お口を閉じて、先生のお話を一生懸命聞くんだよ。先生は、今動いちゃだめとか、しゃがんで頭を抱えてとか、先生の周りに集まってとか、ハンカチやコップ入れ袋でお口や鼻をおさえてなどと言うから、先生の言うとおりにするんだよ。そうすれば、みんな誰も死なずに助かるよ。大好きなお母さんともまた会えるよ。先生が真剣な顔でお話を始めたら、さっとお口を閉じて、さっとお耳を先生の方に傾げるんだよ。自分の命を守るために、大好きなお母さんと会うために、お話はしっかり聞こうね。しっかり聞ける子は、心配すること何にもないんだよ。ねえ、みんな。死なないよね。先生の言うことしっかり聞いて、自分の命を守るよね。先生たちも死なないよ。」

園庭に避難終結し、担任の点呼を終えた子どもたちに、私は真剣な、それこそ真剣な眼差しと口調で、語ります。子どもたちは、おへそをみんな私の方へ向け、これまた真顔で私の話に聞き入ります。その光景は、投手の球をバシッと受けとめる捕手の姿。まさに話者と聞く者が呼応し合っています。

今日は今年6回目の避難訓練。精華幼稚園では、毎月1回避難訓練を行っています。地震が起きたら、火事が起きたら、不審者が侵入してきたらと、いろいろな場面を想定しながら訓練を繰り返しています。子どもたちも具体的な臨場を重ねながら、体を通して緊急時の行動様式を学んでいます。

ところで、災害はいつ起こるか分かりません。不審者もいつ侵入してくるか分かりません。そんなことも視野に入れながら、避難訓練は回を重ねていきます。そして、やがて、前触れなしの抜き打ち訓練に移るのです。でも、そのころになると、子どもたちも一つの行動様式が身に付いてきて、突発的に下される担任以外の先生の指示にも忠実に従って、迅速に避難行動を展開します。その姿たるや、まさに見事の一言です。命を守る訓練ですから、指導する側の先生たちも気合が入っています。その真剣で一生懸命の姿が、一種独特のきりっと張り詰めた空気をつくり出します。その空気に包まれて、子どもたちは持てる力を遺憾なく発揮し、てきぱきと行動します。お砂場で先生と一緒に作ったお山にトンネルを掘っていた子たちが、お庭で三輪車を走らせていた子たちが、お部屋でブロック遊びに興じていた子たちが、突然の放送に耳を傾け、一斉に動き出します。弛緩から緊張へ、開放から収縮へ、幼稚園全体がめりからはりへと切り換わります。

さて、先月号で私は、子どもたちを集中させるには子どもたちが集中したくなるようにすればいいと申しました。それならば、子どもたちに聞かせるには子どもたちが聞きたくなるようにすればいいということになります。もちろんそのとおりです。そのとおりですが、この「聞く」に関しては、時に本人の意思に逆らうこともあり得ます。その一例が、今回取り上げた命のために聞かせるということです。イギリスでもアメリカでも、大人の言うことを黙って聞くということは常識であり、幼児期の大事なしつけと考えられているそうです。ですから、必要に応じて訓練もしているそうです。日本でも同じではないでしょうか。「聞く」は、何よりも大切な命に直結しているのです。

次号は「聞く」シリーズ第3弾。「聞く」と相手意識の関係です。

「聞く」は思いやりの原点

聞くことの大切さを見つめ直して10余年。先月号、先々月号でお話しした『聞く』は命を守る』『聞く』は学びの原点』は、今実感に裏打ちされて私の教育信条の柱の一本となっています。今月号は、聞くことの大切さ第3弾として、聞くことと相手意識の関係について述べてみたいと思います。題して『聞く』は思いやりの原点』です。

みなさんは、人に話をするとき、話の内容は別として、この人は、あるいはこの人たちは話しにくい人たちだなあと感じたことはありませんか。その反対に、この人は、あるいはこの人たちは話しやすい人たちだなあと感じたことはありませんか。きっとどなたも、多かれ少なかれこのような経験はおありのことと思います。

話しやすかったときと話しにくかったときを比べてみましょう。まずは話しやすかったときを思い出してみましょう。話しやすかったときは、相手が私の方を向いている、私の目を見つめている、相槌を打ちながら聞いている、時に笑ったり驚いたりする、言うなれば、私の話に対して何らかの反応を示してくれている、つまり私の方に意識を向けてくれていると感じたときではなかったでしょうか。その反対に、話しにくいと感じたときはどんなときだったでしょう。相手から、あるいは客席からの反応がなく、果たして自分の話を聞いてくれているのかと心配になってしまう。語りかけるように話しても返事があまり返ってこない。相槌もない。笑いや驚きを誘っても大して乗ってこない。相手の側に立って相手の思いを代弁するような話をしていても期待するほどの反応は見られない。要するに、聞き手である相手から聞こうという姿勢が感じられないとき、言い換えれば、私の方に意識を十分向けてくれていないと感じたときではなかったでしょうか。

演劇は、演じる者と観る者で創ると言われます。音楽も奏でる者と聴く者で創ると言われます。演じる者の心を、奏でる者の心を、観る者、聴く者が受けとめ、その思いに共感しながら観、また聴き、その共感から生まれる感動の空気が再び演じる者、奏でる者を包み込むのです。演じる者、奏でる者は、その空気を感じ、演技や演奏にさらに力を込めていきます。

後で満足感や充足感が残るときの話す者、聞く者の関係も同じだと考えます。話し手は、聞き手に、聞き手の立場や気持ちを尊重しながら、しかし、しっかり受けとめてほしいと願って話します。聞き手は、話し手が何を言いたいのか、何を伝えたいのか話し手の立場や気持ちを考えながら、聞き取ろうと思って耳を傾けます。ですから、相槌も打ちます。笑顔も返します。共感、共鳴は態度で示します。それより何より話し手の目を見つめます。話し手の語りを目で受けとめます。目と目が呼応し合い、心のキャッチボールが始まります。

話し手はジョークというボールを投げ込みます。聞き手は笑いというボールを返します。話し手は、目を見開いて意見・主張というボールを投げ込みます。聞き手は、うなずきながら共感・共鳴というボールを投げ返します。心のキャッチボールは、投げる者、受け取る者双方に、相手を受け入れこれに伝えるという嬉しさ、心地よさを運びます。

心のキャッチボールの基軸は、相手肯定感です。話し手は、まずは聞き手を肯定的に受けとめ、相手は私の話を聞いてくれるものと信じて話しかけます。聞き手も話し手を肯定的に受けとめ、相手の思いの理解に努めます。ここには悪意や反感は存在しません。存在するのは、善意、好意、尊重感です。話し手も聞き手も互いに相手の立場を大事にしています。これを聞くことに視点を当てて見てみると、「聞く」はまさに思いやりの原点とすることができましょう。

挨拶は心を結ぶ虹の架け橋

新しい年を迎えました。今年もたくさんの方々から新年のご挨拶をいただきました。ありがとうございました。しかし、私自身昨年父を亡くしましたので、年頭のご挨拶を控えさせていただきました。皆様のご厚情に深謝いたすとともに、よろしくご理解のほどお願い申し上げる次第です。

さて、年頭の挨拶とは別に、普段交わす挨拶にも、日々いっぱい嬉しさ、ありがたさ、そして大切さを感じている私です。今年最初の話は、こんな挨拶に関するお話です。

ピピー、ピピー、ピピー、ピー。幼稚園の正門前。笛の音を聞きつけ、お向かいのおばさんが店先に顔を出します。私は、バスの扉を開けて呼びかけます。

「みんな、元気かな。ほら、パン屋のおばさんもお迎えに出てきてくださってるよ。お早うございます。」

「お早うございます。」

まるで風船でも破裂したかのように、バスの中から大きな声が飛び出します。

「おうほほほほ。すごいねえ。元気だねえ。おばさん、嬉しくなっちゃうよ。」

おばさんは、満面に笑みを浮かべて手をたたきます。幼稚園とお向かいの交流は、今日もこうして始まります。

バスが去った後も園児の登園は続きます。

「お早うございます。〇〇ちゃん、お早う。」「お早うございます。△△ちゃん、今日はパパと一緒になんだ。お早う。」「お早うございます。□□ちゃん、昨日のクリスマス会、楽しかったねえ。お早う。」

私は、まずはお父さんやお母さんに、続いて子どもたちに声をかけます。

「お早うございます。」「お早う。」「……………」

大きな声、小さな声。いろいろな声が返ってきます。私より先に声をかけてくる子もいます。自転車の座席で狸寝入りなどしながら、私が顔を近づけると突然自転車が震えるほどの声で「お早う。」と叫ぶ子もいます。昨日、一昨日と元気だったのに、今日はどうもつむいてしまう子もいます。子どもはその時々で、あるいはその刹那刹那で、気が入ったり気がそれたりします。ですからびっくりするような大きな声を出したかと思うと、急に蚊の鳴くような声になったり口をつぐんでしまったりすることもあります。でも、その変化は親には予測できません。

私からの声に急にうつむいてしまったわが子に、家であんなに練習してきたのにと怒りを抑えながらも狼狽してしまうお母さんに出くわすことがあります。でも、子どもを責めないでください。子どもには挨拶の必要性がまだ十分理解できていないのです。その点、私たち大人は違います。大人は、挨拶がどれほど大切か、人にどれほど嬉しさ、心地よさを運ぶかを知っています。

この嬉しさ、心地よさは、挨拶された相手だけが享受するものではありません。挨拶された相手が、嬉しさ、心地よさを感じたと悟った瞬間、挨拶をした側も同様に嬉しさ、心地よさを感じます。「挨拶は心を結ぶ虹の架け橋」——私の胸にはいつしか、こんな言葉が宿るようになりました。

私は、これまで数多くの子どもたちにこの言葉とこの言葉の意味を語ってきました。そして今、私はみなさんにも呼びかけます。子どもたちが生涯心地よさを享受し続けるとともに、これから出会う人たちと豊かな人間関係を築いていけるよう、子どもたちに挨拶の習慣を身につけさせていきましょう。

ところで、先述したように、子どもたちはまだ挨拶の大切さを十分理解できてはいません。今はまだ挨拶という形式の環境で包むときでしょう。昔から「環境は人をつくる」とも、「親は子の鑑」とも言われます。私たち大人は、子どもたちのよき環境、よきお手本となるべく、率先して挨拶のお手本を示していくことにいたしましょう。

大地と大樹，船と帆柱

父さんと一緒に上げた鯉のぼり今鉄格子から眺めているよ
おやすみと口に出しては言ったけど母思い出し眠れずにいる

これは、静岡市にある少年院からいただいた歌集に掲載されている二人の少年の歌です。父を、そして、母を思う様が目に浮かんできます。歌集にはたくさんの少年たちの歌が載っていて、どの歌にもそれぞれの思いが込められています。

おばあちゃん一周忌には行くからねそのときまでに僕は変わるよ
寂しいよいつも心はひとりきり家族の中に僕はいますか
涙溜め声震わせて話す母僕よりずっと辛いんだよ

(歌集名は、駿府学園歌集「安倍川」第15集です。作者名は記されていないので作者不詳ということになりますが、取り上げさせていただく点、紙面を借りてご了承願う次第です。)

荒木とよひさん作の「四季の歌」という歌があります。これまで何人もの歌手がレコーディングをし、文化庁の「日本の歌100選」にも選ばれていますので、どなたも耳にされたことがおありでしょう。その歌詞に、次のような一節があります。

「夏を愛する人は心強き人 岩を砕く波のようなぼくの父親」
「冬を愛する人は心広き人 根雪をとかす大地のようなぼくの母親」

岩を砕く波のように強くたくましい父。ゆったりとふとこころに受けとめ、あたたかく包んでくれるやさしい母。荒木さんは、より多く父性を具えている父親と、より多く母性を具えている母親に対して誰しもが抱く根本願望を代弁しているようです。先の少年たちもやはり同じ思いで父や母を見ているのでしょう。一人悔いの日々を送る少年たちは、心の拠り所を家族に求めているのです。

この思いは、大人子どもを問いません。幼児とて根本的には同じです。ただ幼児はこのような思いを口にはしません。表現するに足る語彙をまだ十分に有してはいないからです。しかし、日々見せる表情、しぐさ、態度は、心の内を歴然と語ります。

参観会などお母さんが幼稚園を訪れた日、子どもたちは心弾ませて何回も何回もお母さんを見つめます。粘土あそびをしながらも、友達と談笑しながらも、目はお母さんの姿を確かめます。お母さんがいてくれる。お母さんが見ていてくれる。そのことを確認し、安心して、また粘土あそびに談笑にと興じ直すのです。年少さんなどは、お母さんに擦り寄っていったりもします。このときのお母さん、子どもたちにとってはまさに広大な大地であり、乗り物に例えるなら広い広い甲板を持つ母船です。

大地もときには吹雪に見舞われます。子鳥たちは心細げに大樹の陰に身を寄せます。大海原を航行する船も、ときには嵐に遭遇します。幼い帆たちは、吹き飛ばされまいとして必死にマストにしがみつきます。吹雪に耐え、嵐に立ち向かうこの大樹、このマスト、まさに家族の柱、父親の姿です。

子どもは思春期を迎えたとき、よいことをしたら褒め、悪いことをしたら厳しく叱ってくれる強くて頼れるお父さんを求めます。心が揺れふと心細くなったとき、両手を大きく広げてふところ深く受けとめてくれるお母さんを求めます。慈愛慈母——子どもたちは、物心ついたときからそんな母を願います。泰然自若——子どもたちは、やがてそんな父を願います。

子どもたちは、小学校も高学年になれば、みんな思春期を迎えます。年長さんもあと5～6年もすれば思春期に差し掛かります。年少さんとて、7～8年で突入です。子どもをゆったりと受けとめる大地と母船、ここというときすぎる子どもたちをしかと支える大樹とマスト。その役割を担うのは自分だと今自覚する賢い親になりたいものです。

子どもは子どもの中で育っていく

精華幼稚園では、学年、学級という言葉を用います。意味は、小学校や中学校のそれとまったく同じです。ちなみに精華幼稚園は、年少は3学級、年中と年長は2学級で構成されています。

学年、学級は、自分たちの所属意識、仲間意識を育みます。教師は、子どもたちの育ちを横から、後からそっと支えます。ですから、年少さんのクラスでは、子どもたちを机の上に伏せさせておいてこんなふうに歌い掛けます。「起きて、起きて、元気な元気なくま組さーん。」「はあい。」子どもたちは一斉に顔を上げます。部屋中に、自分はいくま組の一員だよと宣言するかのよう大きな声が響き渡ります。うさぎ組さんの部屋でもぞう組さんの部屋でも、同じように大きな声が響きます。

教師は、初めはわざと他のクラスの名前を呼びます。「起きて、起きて、元気な元気なうさぎ組さーん。」他のクラスの名前を呼ばれた子どもたちは知らんぷり。教師は続けて歌い掛けます。「起きて、起きて、元気な元気なぞう組さーん。」クスクス笑う子はいるけれど、子どもたちは今度も顔を上げません。教師はさらに歌います。「起きて、起きて、元気な元気なくま組さーん。」「はあい。」子どもたちの顔の誇らしげなこと。一人一人の目が輝きます。子どもたちは、こうして集団に対する認識を深めていきます。

入園したばかりの子どもたちは、幼稚園という世界、学級、学年という社会の理解がまだほとんどできていません。こんなにたくさんの自分と同じような年頃の人間と毎日同じ部屋に入って一緒に過ごすという経験も、これまで皆無です。部屋で、廊下で、園庭で群れて遊ぶことも、経験を積むのはこれからです。ですから、自分の周りにいる自分と同じような人間たち（やがて友達と呼ぶに値するような存在になる）とのかかわり方がたいへん不器用です。ほとんどできないという子も見受けられます。

Aちゃんは、箱の中からブロックを取り出し、床に並べ始めます。脇を通りかかったBちゃんは、並べられたブロックを石蹴りの石でも蹴るようにポンと蹴飛ばします。途端にAちゃんは泣き出します。

Cちゃんは、見つけたカスタネットを手に取りました。Dちゃんもカスタネットに気づき、さっと手を伸ばしてCちゃんの手にしたカスタネットをつかみました。Cちゃんは嫌がってDちゃんの手を振り払います。手を払われたDちゃんは、ドンと両手でCちゃんを押します。押されたCちゃんは、とっさにDちゃんの手を噛み付きます。「わあん。」Dちゃんは大声を上げて泣き始めます。そんな中、Eちゃんは、自分がどのように行動していいのか分からず部屋の真ん中で突っ立っています。

1ヵ月後、AちゃんもBちゃんもCちゃんもDちゃんも、着換えが終わると、それぞれブロックや絵本やままごと遊びに興じ始めます。でも、Eちゃんはまだ遊びらしい遊びを見つけられませんが、ままごと遊びをしている友達のところへ行くと、にんじんや大根を手を取ったり、絵本を見ている子たちの頭をトントンとたたいたりします。ままごと遊びの子たちも絵本を見ている子たちも、Eちゃんの行為が邪魔と感じ始めます。「やめて。」Eちゃんを振り払います。Eちゃんはその反応が楽しいのか、やめようとしません。邪魔された子どもたちは、自分たちの遊びを守ろうとして振り払いを強めます。Eちゃんも手で応戦です。その手が相手の顔をつかみます。手を離すと、顔には赤い筋が2本残っていました。

子どもたちは、日々教師の支援を受けながら、相手に対する認識を深め、相手へのかかわり方を向上させていきます。集団意識も集団への所属意識も高めていきます。Eちゃんも、Eちゃんなりのペースで相手を知り、かかわり方を学んでいきます。1年ないし2年後にはEちゃんも、たくさんの友達と折り合いを付けながら群れて遊ぶ楽しさを共有していることでしょう。

集団意識も所属意識もうまく折り合いを付けながら人とかかわる人間関係調整力も、家庭で育てることはできません。幼稚園という世界の中で、あるいは学級、学年という社会の中で、子ども自らが場数を踏み、いくつものトラブルを経ながら身に付け向上させていくものです。私たち大人には、そんな子どもたちの育ちをゆったりと眺めていられる度量の大きさが求められます。

(平成22年3月)